

令和 2 年 № 71  
春ひがん号

# あきばさん

発行人 / 発行所  
秋葉山 新井 寺  
272-0144  
千葉県市川市新井  
1 丁目 9 の 1  
電話 047-357-8319  
FAX 047-357-8399  
mail: info@shinseiji.jp  
http://www.shinseiji.jp  
郵便振替 00150-2-282968



島根県松江市大根島 (だいこんじま)

## 春彼岸と

### 新型コロナウイルス感染症

#### 当山住持

寒苦を乗り越えて、毎年訪れる「寒さ暑さも彼岸まで」の春彼岸の時節になりました。

本年は、その春彼岸の前に「新型コロナウイルス感染症」<sup>しんかん</sup>の世界的流行のニュースが世の中を震撼させています。生命にかかわる大病でもあり、今現在、これといった特効薬も開発されていないため、世界中が大変困惑している状況です。生命を守る医療機関をはじめ、政治・経済・株価市場・教育機関・スポーツ・商業娯楽施設など、日常生活に密接に関連した様々な分野に多大な影響を及ぼし、世界中の人びとが大変な不安や苦悩を募らせています。

私共は今、平和なさとの世界に到

る「彼岸」の意義とは逆行した真つ暗闇の世界にいるようです。しかし、世の中や人生がいかに苦しくとも、厳しくとも、生かされています。また、生き抜いていかなければなりません。世のため、人のため、家族・自分自身のために……お釈迦さまの教えのごとく、「人生は思うにままならない、苦の娑婆」です。日々生かされている人生の苦を、現実的に正しく自覚認識して、正しい信仰心、人生観のもとに、強い精神力をもつて、平和な世界・人生を構築するため、忍耐強く努力精進していかなければなりません。

日ごろ、私共は世界や人生が平和で幸福でありますようにという願いのもとに生かされています。今般の新型コロナウイルス感染症のような大病が世界的に大流行するなど、思ってもみなかった大災難です。

彼岸とは、思うにままならない人生において正しい信仰心をさらに深め、具体的には「六波羅蜜」<sup>ろくはらみつ</sup>の教えを実践修行し「到彼岸」<sup>とうひがん</sup>、理想の平和な世界に到る教えです。

忍耐強く新型コロナウイルス感染症に向きあい、精進してまいりましょう。

合掌

## 仏教の社会性

### 「自と他がいのちで つながっている社会」



新型コロナウイルス感染症の感染拡大が深刻になりはじめたころ、消毒液や除菌ティッシュなどの消毒用品、そして「マスク」がたちまちに街中から姿を消しました。しばらくすると、「マスクの次は紙製品が買えなくなる」という誰かの誤報によって、またたく間に日本中のトイレトペーパーが売り切れになりました。いまもなお、全国的にマスクや衛生用品は入手困難で、トイレトペーパーも潤沢に購入できる状況ではありません。

そういうときに、花屋の妹がこんな話をしてくれました。買いたくに行つたスーパーで、たまたま声をかけられたおばあさんの話です。

そのおばあさんは、家のトイレトペーパーがなくなりそうなので、買いに出かけたところ、自分が暮らして

いる街ではどこも売り切れで買えず、電車に乗ってはるばるとなりの街から買いにやっ来て来たそうです。ご高齢で腰も曲がり、歩くのもたいへんそうなおばあさん。結局、おばあさんは、とても困りの様子だったといいますが、そのスーパーでも、トイレトペーパーを買うことができなかったようです。妹は「うちのトイレトペーパーを分けてあげたいくらいだった」と言っていました。

別の日、トイレトペーパーが品薄になつていくというニュースの中で、ひとりで行くつもトイレトペーパーを買いたいものカートに載せている人の姿を見て、「あのおばあさん、どうしたかな」と妹は心配そうにつぶやいていました。また別のニュースでは、「悪いからひとつ返すわ」と、一度は手にしたトイレトペーパーを棚に戻していたご婦人の姿もありました。

妹の話聞きながら、お釈迦さまの「縁起」の教えを思いました。

縁起がいい。縁起でもない。縁起をかつぐ。日常生活の中でもときどき使われる「縁起」ということばですが、もとは仏教のことばです。そして、仏教で説くところの縁起と、こんにち日常生活で使われている縁起とは、じつは、意味が違うのです。

仏教において、「縁起」とは、次のように説かれます。

これある故にかれあり

これ起こる故にかれ起こる

これ無き故にかれ無く

これ滅する故にかれ滅す

『自説経』

ありとあらゆるものは、お互いに、さまざまに関わりあいの中で存在していて、ただそれだけで、独立して存在しているものはないということです。すなわち、仏教が説く「縁起」とは、もちつ、もたれつ、支え、支えられて生かされている現実、その世界観なのです。仏教が説く社会性といってもよいかもしれませぬ。



薬師如来 (やくしによらい)  
薬の入った壺を持ち医薬の  
ほとけ様として信仰されます  
早期終息を願っています

改めて、日常生活をふりかえってみると、わたしたちは、自分ひとりですべて生きているのではないということに気づきます。たとえば、いのちを保つために食事をします。その食材となるのは、お米、お肉、お魚、お野菜……、どれもほかの生きもののいのちです。わたしたちは、ほかの生きもののいのちをいただいでしか、生きていくことができないのです。大なり小なり、何かを行なうにしても、自分ひとりの力だけでは、ままならないことばかりです。そして、誰かの何気ないひと言やふるまいに助けられたり、励まされたりすることもあります。

物心ともに、ほかの何かに、ほかの誰かに支えられている、さまざまなおかげさま」のどまん中に生かされていく自分の気づくのです。

お釈迦さまは、そういった日常底を「縁起」という教えでお示しくださっているのです。

「縁起」の世界に生かされている現実に気づくとき、「自分さえよければよい」というおもいにはならないのではないのでしょうか。そういうおもいではいられなくなるのではないのでしょうか。そこに展開されるのは、自他の垣根がとりはわれた「ひとつの世界」です。そこには、感謝の気持ちとともに、おのずと他者に対する思いやりのところが芽生え、育ち、熟されていくのだらうと思います。他者への思いやりのところは、いかえれば、「慈悲のこころ」ともいえましよう。

釈尊が説いている自と他がいのちでつながっている社会とは、心と心の結びつき、他者の心の痛みをとにかく自分の心の痛みとして受けとめていく関係だと思えます。

奈良康明先生

お釈迦さまの教えには、しばしば

「他人を自分の身にひきあてて」ということばが登場します。具体的には、奈良先生がおっしゃる「他者の心の痛みをとにかく自分の心の痛みとして受けとめていく」ということです。

お釈迦さまのこのおもいがあれば、おぼあさんはトイレットペーパーを買うことが出来たかできたかもしれないと考えています。

しかしながら、そうはいっても、いざとなると、他者へおもいを運ぶどころか、自分のことばかりを考えてしまっている自分に気づきます。そういう自分を懺悔さんげ、反省しながらも、「自他ぶつ続きの世界」という世界観・意識を持ち続け、努めてそこによりそっていくことが大切なのだらうと思います。

われは万人の友である。  
万人の仲間である。  
一切の生きとし生けるものの同情者ある。  
慈しみの心を修めて、  
常に無傷害を楽しむ。

『テラガーター』

(副住職しるす)

# おはなのおはなし

## ズズランの日



五月一日は、大切な人の幸せを願って「ズズラン」を贈る日です。ケルト人の時代からヨーロッパでは、ズズランは「春を表す象徴」とされ、親しまれてきました。この「ズズランの日」は、フランスの文化に由来します。

十六世紀のフランス王シャルル九世（一五五〇〜一五七四）が、ある時にもらったズズランに「幸せをもたらす」という花言葉があると知りました。これをきっかけに、シャルル九世は「幸せのおすそわけ」として、宮廷の女性たちへ、毎年五月一日にズズランを贈るようになりました。

一般的に、庶民に「ズズランの日」が広まったのは十九世紀とされていますが、その文化は今でもフランスに根づいています。現在では、五月一日が近づくと、フランスの街のあちらこちらでは、ズズランが様々な人から販売されています。唯一このときだけは、花屋ではなくても、誰でも花を売ることができるとは（ズズランのみ。その他ルール設定有り）。

ズズランの日を始めたシャルル九世は、虚弱で内向的な性格でありながら、宗教的権力闘争の中で波乱万丈の人生を送りました。そういう人だからこそ、幸せにあこがれ、人々の幸せを願い、ズズランを贈るという文化をつくったのかもしれない。

花には言葉にならないおもいを伝える力があるのだと思います。

（花屋 秋葉山 店主しるす）

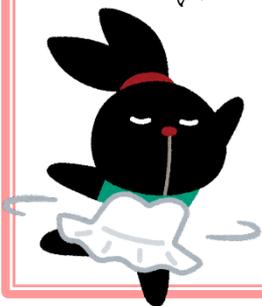
## 心に 地球に

### お花をさかせましょう

毎年、春のお彼岸には、お花の種をお配りしています。「育てよう！みんなで花を あなたのそばに！」をテーマに、お花と心を通わせて、思いやりの心を育んでほしいと願いを込めた全日本仏教婦人連盟の活動です。

お花は、わたしたちの心を和ませ、家庭や社会を明るくやさしくしてくれます。添付のリーフレットも、ぜひ一読いただき、たのしみながら種を植えて、愛情をたっぷり注いで育ててみてくださいませ。

きつと、かわいらしいお花が、しあわせをもたらしてくれることでしょう。



## 編集後記



身心しんじんに、法さんぼういまだ参さんぼう飽さんぼうせざるには、法さんぼうすでにたれりとおぼゆ。法さんぼうもし身心しんじんに充足すれば、ひとかたは、たらずとおぼゆるなり。

『正法眼蔵』「現成公案」

学びの足りない人ほど、十分に学んだと思う。よく学び修行をしている人ほど、自分はまだまだ足りないと思う。

今春、師家しけ養成所ようせいじよの修行課程を了おえることができました。さまざま修行道場やお寺にお世話になり、さまざまな老師や和尚様 そしてすばらしい教えに出会い、よき師、よき法の仲間恵まれ、じつに貴重な学びや経験をさせていただくことができました。勝縁しょうごんに感謝しています。その学びの中でつよく感じたことは、自分自身の未熟さと疎学さでした。

師家養成所で学ばせていただいたことを皆様に伝えるさせていただきますが、わたしを支えてくださる御縁への御恩返しです。その中で、つねに謙虚に学べる自分でありたいと願っています。くれぐれもご自愛くださいませ。